

震災直後における女子大生の行動に与えた影響と その後の意識の変化について

——日本女子大学生を対象として——

Research on the Consequences of Female College Students' Actions and
Change of Consciousness after the Earthquake Disaster

住居学科 福田 裕子 定行まり子
Dept. of Housing and Architecture Hiroko Fukuda Mariko Sadayuki

抄 録 本稿では、住居学を専攻する学部生の一部を対象に、3月11日に発生した東日本大震災に関して①震災当日の生活、②計画停電該当日の生活、③震災から約1ヶ月半後における意識変化を記述した記録の分析を行った。その結果、震災当日の彼女たちの行動の様子や、計画停電の前後でどのように過ごしていたのか、加えて3月11日を経てこれまでの生活を見直し、今後の暮らしについての各々の考えが明らかになった。3月11日は春休みだったということもあり、関東圏にある自宅でのんびり過ごしていた学生が多いが、帰宅難民を経験し、学校施設や公共施設に宿泊した事例もいくつか見られる。一方で計画停電を経験した学生は、各家庭内において水・食料・あかりの確保のために様々な工夫を行っている様子が分かった。特徴としては停電時間を中心に生活が営まれていることや、停電開始時間が明確でないため戸惑って生活していることが挙げられる。これらにより、これまでいかに電気に依存して生活してきたかが明らかになった形である。このような経験を経て、「今まで当たり前のものであった生活の脆さに気付くのと同時にありがたみを実感した」という学生は多い。暮らしに工夫を加えることで節電だけではなくこれまでの暮らし方を改めて考え直すきっかけとなった。

キーワード：住生活、生活意識、大学生、震災

Abstract The Women's College students majoring in Housing recorded their actions on March 11 and days during in scheduled blackouts. By analyzing the records, it could be seen behaved on the day and before and after the scheduled blackouts. In addition, their ideas about continuing on became clear. Since March 11 was spring vacation, many students were relaxing at home in the Kanto area, but others were stranded as commuters while others stayed at school or public facilities. On the other hand, students who experienced scheduled blackouts reported various ways of securing reserves of water, food, and lights at home. Power blackouts also revealed how there students' lives have depended on a stable supply of electricity. Many students who reported, "I realized the weakness and the value of ordinary life" were seen. And this led to a consideration of not only power saving but living sense changes.

Keywords : dwelling life, living sense, college student, earthquake disaster

1. 研究の背景と目的

2011年3月11日に東日本大震災が発生した。

被害は被災地である東北地方のみにとどまらず、首都圏や関東においても、電話回線が混み合い携帯電話が通じなくなったり、交通機関へ影響を及ぼす

など、当日には多くの帰宅困難者があらわれた。その後は計画停電や積極的な節電活動など、くらしや意識の面においても大きな影響を与えている。それに伴いこれまでの暮らしを振り返り、今後へ向けて改めて一人ひとりが自分の生活を見直していく必要性を感じざるを得ない。そこで本研究では住居学科に所属する一部の学生を対象とした授業内レポートを通して、震災当日や計画停電該当日の生活記録を資料として残し、震災前後における学生たちの意識変化をまとめることを目的としている。

2. 研究対象と方法

2011年4月25日～5月2日にかけて、本学学生1～3年生の一部を対象に『震災を通して感じたこと～自分と家族の暮らし～』というタイトルのもとレポートを提出してもらった。課題内容は二部構成となっており、①震災当日の生活記録または計画停電該当日の生活記録、②3月11日から約1ヶ月経ち、震災の前後における意識変化を自由記述により示してもらった。回答学生の構成と地震直後の居場所を下表および下図において示す。

Table 1 震災当日の生活記録

回答数	100	
学年内訳	2年	68
	3年	30
	他	2



Fig. 1 震災直後の居場所

Table 2 計画停電の生活記録

回答数	36	
学年内訳	1年	15
	2年	12
	3年	9

Table 3 意識変化について

回答数	80	
学年内訳	1年	0
	2年	80
	3年	0

3. 震災当日の生活記録

3月11日正午から翌12日16時までの自由記述による記録である。当日はまだ春休みだったということもあり、地震発生時には自宅やその他施設にいた学生が多く見られる (Table 4)。

Table 4にある『その他』の内訳としては、23区内駅周辺のビルや、ショッピングモールなど商業施設である。

その中から①地震発生時、②地震直後、③就寝場

Table 4 地震発生時の学生がいた場所

場所	自宅	学校施設	駅	路上
人数	42	4	5	6
場所	店舗	スポーツ施設	オフィス	その他
人数	14	9	4	16

所の3つの時系列に沿って、当該時点にいた場所から学生の行動分類を行った。次項からはその分類ごとに行動の記録をまとめることとする。

3-1 自宅で過ごし続けたグループ

地震発生時から同日就寝時刻までほぼ通して自宅に居続けたグループである (Fig. 2)。

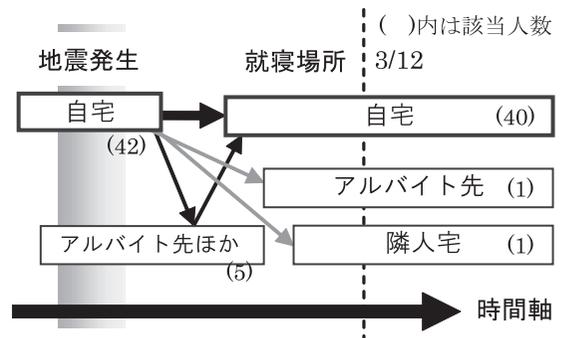


Fig. 2 自宅で過ごし続けたグループ

先述したように春休み中だったため、地震発生時にはのんびりと過ごしていた学生が多かったが、様々な行為が見られた。発生後の動きとしては、事態を把握するため「テレビ」や「Twitter」を駆使し情報収集をしていたという記述が最も多い。都内でも震度5弱を観測した中、「部屋のドアを開けて揺れが収まるのを待った」というものや「ガス栓を閉め外に出た」「避難場所である小学校へ移動した」というものも少数であったが見られ、避難へ向けての冷静かつ迅速な対応が根付いている様子をうかがうことができる。時間が経つにつれアルバイトに向けて動き出した学生もいたが、交通機関が止まっていたことに伴い、自宅に引き返した者が数人見られた。一方で、勤務後アルバイト先にて翌日を迎えた事例もあった。

家族との連絡に関しては、自宅で家族と一緒にいた者と携帯電話などで連絡を試みた学生がおり、地震直後に運よく家族からの連絡を受け取れたケース

と、なかなかつながらなかったというケースもあり様々である。自宅に1人であることに恐怖感を抱き、近隣の高齢者宅に宿泊したという事例も1件ある。

3-2 帰宅難民になりながらも帰宅できたグループ

学校施設を始めとする外出先から帰宅し、自宅で就寝することができたのは、25名である (Fig. 3)。アルバイトや買い物など様々な理由で外出しているものの自宅周辺で過ごしていた事例は即座に徒歩での帰宅ができ、人によっては他の家族を車で迎えに行くといった行動をとっている。

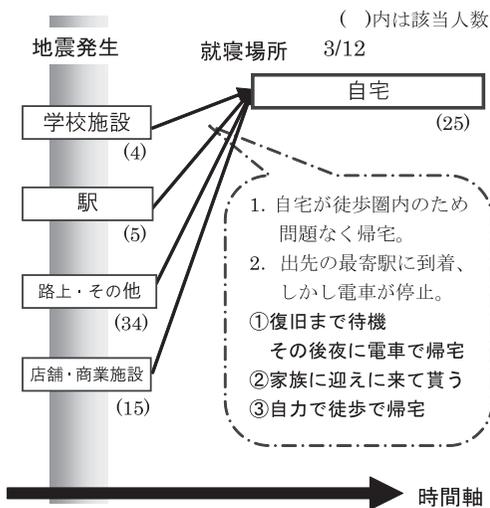


Fig. 3 外出していたが帰宅できたグループ

一方で、地震発生時にいた場所を離れ電車を利用しようと動いた事例に関しては、路上では即座に情報を得ることができなため多くの人が駅に殺到した様子について書かれており、電車が停止したため「バスの乗り場では行列」「携帯電話が繋がらないため公衆電話の前にも行列ができていた」という記述から、駅がパンクしていた様子が分かる。

帰宅までの手段としては、①複数の駅を徒歩で移動し、その後夜になってから復旧した路線に乗り帰宅したというケースや、②在宅していた家族とどうにか連絡を取り車で迎えに来てもらったというケース、③自力で自宅まで徒歩で帰ったというケースの三つが挙げられている。①のケースに関しては帰宅時刻が日付の変わった後だった学生が多く、非常に「体力を消耗した」との記述があり、日頃から

道に精通していることと基本的な体力の必要性について感じた学生もいる。

3-3 施設や他人宅に宿泊したグループ

決して多い数ではないが、自宅以外の施設にて夜を明かした学生も何人か見られた (Fig. 4)。地震発生から直後にかけて学校施設にいた者の中では、徒歩で帰れる圏内だった者は帰宅しているが、そのまま学校施設に宿泊し、翌日の昼前から午後間に帰宅した者がそれぞれいた。ホテルに宿泊した学生に

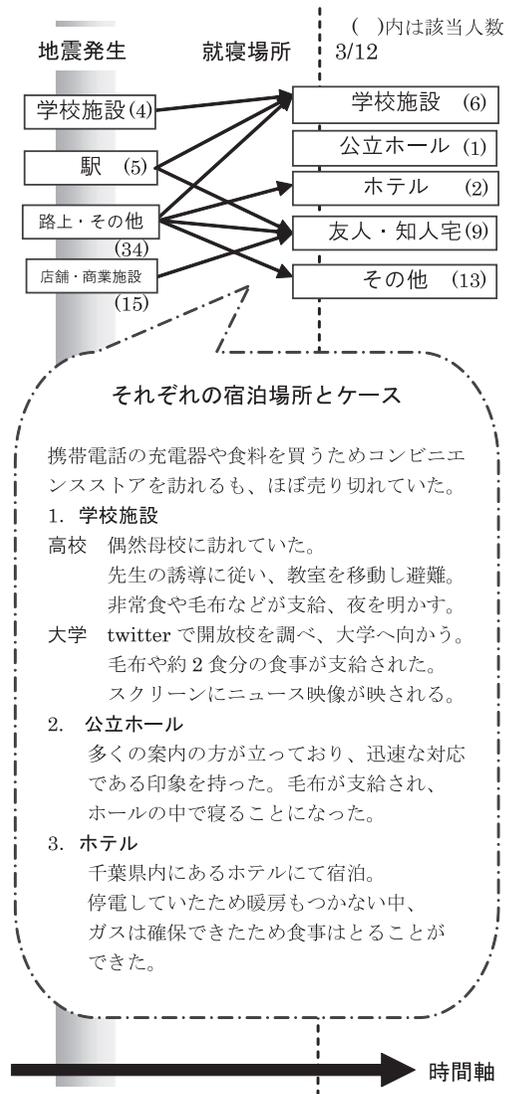


Fig. 4 施設や他人宅に宿泊したグループ

については、サークルの合宿のため千葉県にある宿に宿泊していたというものである。

夜には緊急地震速報が何度も鳴り響いていたため、あまり眠れなかった者が多かったようである。

4. 計画停電の生活記録

計画停電の発生する前日夜から当日夜までを自由記述により記録してもらった。該当グループによって停電の時間は異なっているが、家庭内で心がけている節電の工夫が多く記録されていた。

4-1 行為の拾い上げ

自由記述によるものであったため、様々な行為が見られる。その中で取り上げていた人数が5人以上であったものを Fig. 5 に示す。

停電時間中に『懐中電灯・ランタン・キャンドルを利用』している記述が30件と最も多く、特に部屋の照明の代わりに懐中電灯を活用している事例が多く見られる。あかりの効力を倍増させるための更なる工夫として、ビニール袋やガラス、鏡などを活かして光の拡散を行っているケースが数件見られた。キャンドルを活用し停電の時間を楽しく過ごすとしていた事例も見られ、火事予防のためにあえて使用を控えるという意見もある。

全体を通して、『朝食』『夕食』を始め食事や家事に関するものなど日常と変わらない項目が多く挙げられている。停電に伴い水道が使えなくなってしまう事例も見られ、停電前には水の備蓄を始めとして様々な準備を行っている様子が明らかになった。

4人以下少数の記述による行為としては、Table 5 に示した通りである。こちらで主に挙げられていた行為からは、調理にかける時間や電気量の節約のために食べ物の消費を工夫している様子や、停電時間中の過ごし方に関するものが幅広く挙げられている。具体的には昼寝をしたり、家族との対話や音楽・ラジオなどを聞く行為であったり、停電であることを利用して「夜空を見に家族で外へ出かける」といったものもある。

4-2 事例のまとめ

本項では生活記録の中からいくつか事例を抜粋し、時系列に沿って行為をとらえていく。Table 6 では、13時50分から計画停電が実施されると予測されていた事例 (Case. A) と、18時40分から夜間

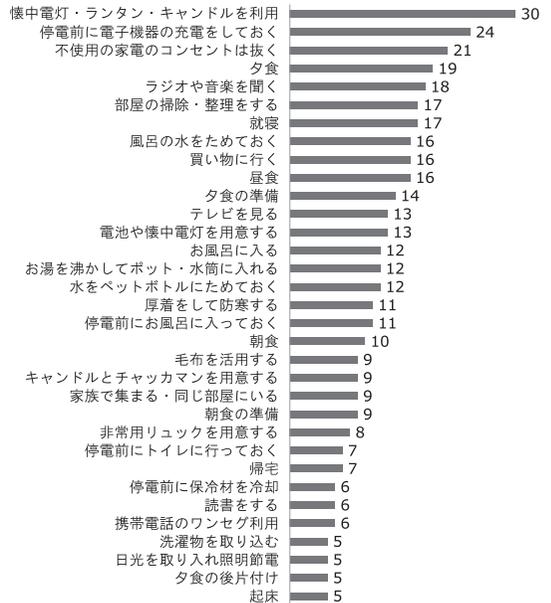


Fig. 5 計画停電該当日の行為拾い上げ

Table 5 4人以下による記述行為とその分類

行為	人数	行為	人数	
水使用の工夫	水を鍋・やかんにためておく	4	昼寝をする	3
	湯たんぽのお湯を翌朝利用する	1	散歩をする	3
	お風呂にためた水で洗濯・浴室掃除	1	ゲームをする	2
	水をバケツにためておく	3	ボードゲームをする	2
節電の工夫	ためた水でトイレを流す	3	携帯電話でインターネット	4
	使う食器を限り、水の使用量を減らす	1	ぶらぶらする	1
	冷蔵庫を極力開けない	3	映画を観る	1
	冷蔵庫以外は極力使わない	2	DVDを観る	1
食事関連	冷蔵庫の電源を落とす	1	お茶を入れる	1
	食器を手洗いする	1	出かける	1
	電源を電池に切り替える	1	雑誌の立ち読み	1
	いつもより早めに就寝	3	昼食の用意	4
	鍋料理をする	2	家事の手伝い	2
	ごはんを炊いておく	2	朝食の後片付け	1
	料理の作り置き	2	食器を片づける	1
	冷凍食から消費する	2	お風呂を掃除する	1
	日持ちするものを備蓄する	2	お風呂をわかす	4
	生ものはその日のうちに調理する	1	シャワーを浴びる	1
	翌日用の食事を作る	1	ドライヤーを使う	2
	食事の下ごしらえ	1	洗濯物をたたむ	4
ストック用のパンを作る	1	洗濯機を回す	1	
ペットボトルの備蓄	1	洗濯物を干す	1	
家族と話す	2	洗濯物をしまう	1	
携帯電話で家族と連絡をとる	1	アイロンかけ	1	
停電中手元だけでできる作業をする	1	新聞を読む	2	
		ペットの散歩をする	1	

に停電が実施された事例 (Case. B) を示す。Case. A に関しては実際には停電が行われていないが、行為の拾い上げが豊富に行われていたことと、自主的な停電状態を続けていた様子が記述されており取り

震災直後における女子大生の行動に与えた影響とその後の意識の変化について

Table 6 計画停電の生活記録事例

Case.A	時刻	Case.B
できるだけ多くのペットボトルに水を入れておく。	停電前夜	お風呂に新しい水を入れておく。
明日冷蔵庫・冷凍庫に入れるための保冷剤を凍らせておく。		お湯を沸かしてポット・水筒に入れておく。
大きい懐中電灯を2つ、ろうそく、太陽光充電式ランタンを用意。		リビングの隅に水筒2本を水入りのペットボトル3本をバケツに入れて用意する。
電池式ラジオを用意。		リビングの隅に電池とろうそくを入れた箱を置いておく。
非常用リュック(食料・飲料水・懐中電灯)を各部屋に用意。		リビングの隅にキャンドルコーナーを設置(太ろうそく4本)。
自転車のタイヤに空気を入れておく。		廊下に家族人数分の非常袋を置いておく。
	起床: 6:30	
水筒に沸騰したお湯と浄水器の水を入れておく。	7:00	
電力利用は控えながら朝食の用意。昼の分まで多めに作る。		
テレビで報道番組を確認。計画停電により電車停止が予想されているらしい。	8:00	朝食の支度。紅茶のお湯はポットから入れる。
	8:30	
車のガソリンを給油しに行く。		
30台ほど並んでおり、30分までとの制限が設けられていた。		
駐車するのに30分もかかるほど混雑しており、店内でも入場制限が設けられていた。	9:30	
照明もかなり落とされており、普段の食品売り場の姿はなかった。	10:00	スーパーに買い物に行く。10階の部屋から階段を利用し降りる。
スーパー出発時には行列がなくなっていた。入店を終え、営業も終了するとのことだった。	10:10	スーパーは計画停電の影響で閉店閉店時間が毎日異なる。
まだ停電は行われていないが、家で使用している電気は極力冷蔵庫のみにした。	10:30	お客も殺到しており、暗い店内で全てのレジで行列ができていた。
		水・卵・牛乳・肉類・パン・紙類が品薄になっていた。
		チェーン店も個人商店も休業になっているか又は小規模営業となっている。
		朝食。コーヒーマシンから入れ、コーヒーマイカーは使わない。
昼食。朝多めに作っていた昼食を食べる。冷めても食べられるメニューにした。	12:00	
保冷剤を冷蔵庫と冷凍庫に入れ、低温を保てるようにした。	12:50	
貼紙をしたり、必要なものは前もって出しておき、冷蔵庫を極力開けないようにした。		
携帯電話やパソコンなどの電子機器の充電は済ませておく。	13:00	
ATMも使えなくなる恐れがあったので、停電前に現金を下ろしておく。	13:20	
家電の電源を落とし、コンセントを抜く。	13:30	
冷蔵庫の電源を落とす。	13:40	
計画停電実施時刻にもなる。停電は始まらない。	13:50	
	↑	
	14:00	夕飯の支度を行う。
		洗濯物を取り込み、たたみ、掃除をする。
		地震・余震によって部屋の片づけ、落下の危険のあるものを移動させる。
計画停電は始まらないが、自主的に停電状態を続けていた。	14:30	(吊り下げ式の戸棚から本を移動させた。額をはずした)
		停電に備え、動線の確保・確認を行う。
携帯電話のワンセグ機能により、自分の居住地域では停電は行われないことが分かった。	15:00	
計画停電予定時刻まではまだ時間があるが、冷蔵庫の身が心配なので、電源をつけた。	15:30	
家族で震災について少し話し合う。避難場所の確認や、どう行動すべきかなど。	16:20	
明るいので照明を使う必要はなかった。		
夕食の準備。	17:00	
	17:30	入浴。できるだけ厚着をする。
		飲料水や排水用に備え、浴槽に水をはっておく。
	↓	
計画停電実施終了予定時刻。	17:50	
夕食の調理。電気は極力使わない。	18:00	夕食のセッティングを行う。
		音楽プレーヤーや携帯電話の充電を済ませておく。
		ろうそく、チャッカマン、懐中電灯、湯たんぽを準備する。
	18:10	ガスストーブを消す。電気のココンセントもできるだけ抜く。
		ガスの元栓を確認。断水になるため、トイレに行っておく。
父帰宅後、家族で夕食を食べる。話し合う。	18:20	停電の開始予定時刻だが、18-22時のうちいつ行われるか不明。
	18:40	↑
		停電開始。いきなりテレビと天井の電気が消えた。
テレビをつける。震災に関する様々な情報を得た。	19:00	ポケットに懐中電灯と携帯電話を入れて過ごす。
		ろうそく1本に点火。鏡やガラス面に反射するように配置する。
	19:20	何もできなくなり、家族で会話をする。
		真っ暗の中、ろうそくの光の下で夕食。
		キャンドルライトのディナーと名付け楽しむ。
		ちょっとした移動に懐中電灯が手放せない。
入浴。シャワーを出す時間に注意し、節電・節水を心がけた。	20:00	音楽プレーヤーだけでは退屈してしまうので、結局会話をし続けることになった。
		停電でまちの明かりがないため、とてもきれいな星空を家から見る事ができた。
万が一のトイレ用の水としても使えるよう、捨てずのためにしておく。	21:00	
	21:40	↓
		停電終了。
		電気のありがたさと暖房の温かさに幸せを感じた。
		夕食の後片付け。洗濯機を回し、屋外に干しておく。
		水筒にお湯を入れておく。
いつもより早めに就寝した。	就寝前	枕元に懐中電灯、めがねケースや携帯電話を準備する。
		寒いので肌着を着込んで寝る。
		2・3日分の着替えを袋に入れ、健康スリッパを部屋の隅に置いておく。

上げることとした。計画停電グループによって停電実施時間が異なるため、停電の実施時間によって入浴時間を調整したり早めに就寝するなど、行為の挙げ方にも時間的な違いがあることが分かる。

5. 震災を経ての意識変化

自由記述によるものであるため、さまざまな語彙による表現が見られた。その中からキーワードとな

りうる単語および単文を抜き出し、大きな項目に分類し図式化を行った。全体を大きく図式化したものをまとめとして Fig. 6 に示し、次項より分類した各項目について詳細を示す。

5-1 電力関連

電力の影響は計画停電や家庭内の節電意識の向上のみに止まらず、電車のダイヤ変化や商業施設の照

明節電など社会的な形でも表れた。それらを受けて、一部の学生は「当たり前前の生活が成立しないことに対する不便さ」を感じている。しかしながら多くの学生は、「これまでの暮らしがいかに電気に依存していたかということに気付いた」という記述を多く残している。具体的には「これまでの電気の使い方が過度なものであった」「(まちで照明の節電が行われても)生活に不便はなかった」といった記述である。

電気に依存した生活の中でも今回のような形により都市や企業が節電に取り組む中で実際に生活をしたことで、「工夫次第で節電が可能だ」と実感しているようである。

5-2 防災意識

「災害はいつ来るのか分からないものである」という考えは誰しも持っているようであるが、「備えの大切さに改めて気付いた」「対策が不十分であることを思い知らされた」という記述が見られたことから、防災に対する意識が実際の行動としては軽視されていたことが分かる。常日頃の備えについてはポイントとして、①物的な備えと②生活環境の備え、③教育の備えといった3つをここでは取り上げる。

5-2-1 物的な備え

物的な備えに関しては、今回ニュースでも多く報道され問題視されていた『買い占め』行為についての言及が最も多い。食料品だけに限らず、乾電池や非常用の防災リュックに対する必要性を改めて見直すきっかけにもなっている。そのためにもまず「ものを整理し、きちんと収納すること」や「家にあるもの、所有物の把握」は重要だと記述している。

今回このような形で買い占め行為が発生した原因としては、「人々が普段から非常時に対して備えていないことの表れ」と考察した記述が多く、「風評被害など予想していなかった二次災害が大きな問題になるのだと実感した」というものもあった。

5-2-2 生活環境の備え

(1) 家財環境

「家具の転倒防止や安定に向けた対策」はもちろんのこと、「壁にかけ絵や写真も固定」すること、「重いものや壊れやすいもの、ガラス製品などは高い場所に置かない」「ものを外に出さず、収納する」といったこまごまとした生活財の置き方におけるものまで、幅広い記述があった。震災当日は研究室の被害だけでも大きなものであり (Photo 1)、「家具

の配置を意識」したり、生活者の防災グッズの興味を高めること、「整理整頓によって得られる美しさ」と被害を小さくする努力が「身の安全を守る」と結びつけた気付きも多い。



Photo 1 3月11日の研究室の様子 (参考)

(2) 住宅・建築環境

被災地に関する記述としては、住宅の「最低限の品質として安全であること」を挙げ、「津波を考慮した住宅づくり」だけでなく、今回「沿岸部にまちを作る時点での注意喚起」に対する疑問や、「常に危機感を忘れない警報の在り方の見直し」の必要性があるとの記述があった。

「家のつくりと家具の配置の見直し」が第一に重要だという意見が多い中、「利便性と安全性を両立させたデザインを提案し、その必要性を具体的に提示する」「家具を造り付けのものにするか事前にアドバイスする」といった技術者・専門家としての目線での記述も見られる。

(3) 都市環境

「自宅と職場・学校間の経路の確認」の必要性に対する記述が非常に多い。これは今回の電車の不通による影響を大きく受けたものと見られる。移動手段として「徒歩」や「自転車」に注目したのも次いで多く、「バスの本数を増やした臨時の有効活用」に対する提案のほかに、「自宅と職場・学校間の距離は短くあるべきだ」とするものや、それが不可能である場合については、「経路に存在する宿泊施設や公共施設のある場所に徒歩で到着できるようにしておく」といったものが見られる。

また、「公共施設の早急な対応」をありがたいと

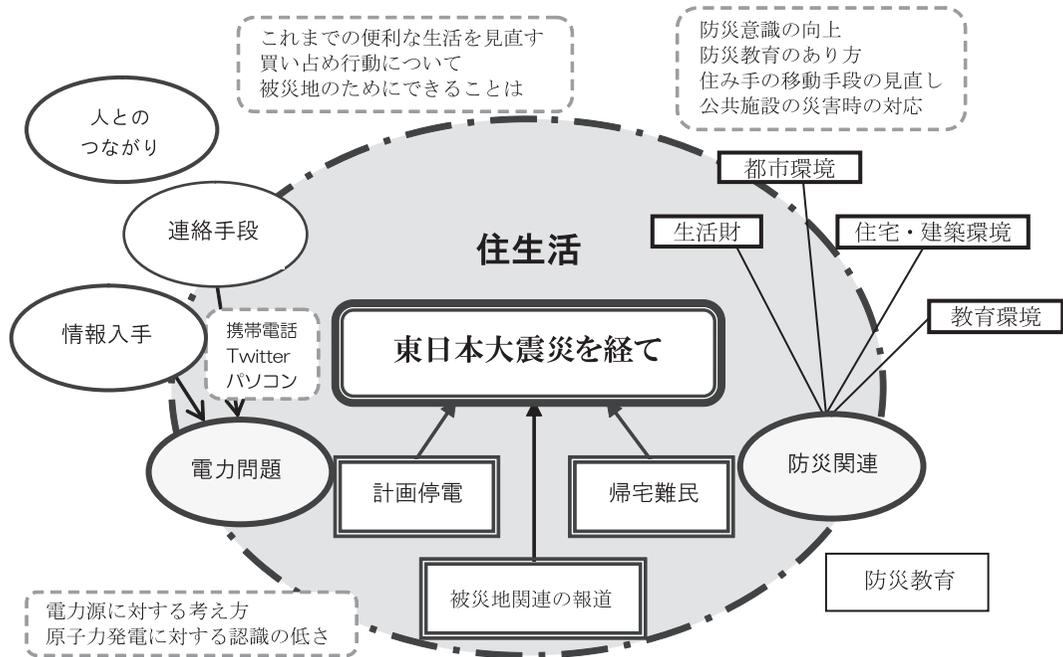


Fig. 6 震災後の意識まとめ

実感したという意見や「無理して帰ろうとせず、トイレも暖もとれる場所に泊まる選択も必要」といった記述からは、身近な場所での「安全の確保」が第一であるという考えが根底にある。同時に「一人での出歩きは控えた方がよい」「空き巣に合わぬよう、家を出る際には注意する」といった治安に対する危惧も見られた。

5-2-3 教育の備え

「緊急避難場所を知らなかった」といった記述と、「個人レベルでの意識向上」を重要視する記述が見られ、防災対策の1つとして、小中学校時代の「防災訓練の徹底」は必要不可欠である。子どものころから防災意識を高めておくことは重要だと考えられ、また今後必要なのはその高い意識を長く持ち続ける努力であり、「女性・子ども・高齢者」といった立場にとっても教育を受けやすい環境や方法の開発が必要なのではないかという記述もある。自治体に限らず「地震大国日本として強固な対策を考慮」し、学校内にとどめず地域での避難訓練にも積極的な参加が必要だと考えられる。

5-4 連絡手段と他人とのつながり

私たちにとって生活必需品だといえる携帯電話が、震災時には絶対ではないということを受けて、連絡方法を見直したり、「公衆電話」や「災害用掲示板」を見直す意見も記述されていた。加えて人とのつながりについて改めて考え直したといった記述が多く見られる。今回の経験を機に、「他者とのつながり」についての意識は家族だけでなく近隣住民に対しても高まっている。「隣人の顔を覚えることから始める」という具体的な意見もあった。

今や通話やメールのやりとりという連絡手段としてだけではなく、インターネット接続、情報収集手段としての役割も果たしている携帯電話の活用方法は幅広く、それだけ私たちが携帯電話に頼っているくらしの姿もまた明らかである。「携帯電話が繋がらない」と「充電が切れてしまうこと」に不安を感じ、「乾電池式の充電器を備えておくべきだと思った」という意識も見られた。

5-5 情報の入手について

携帯電話の存在の大きさといざという時の脆弱性を受けて、役に立ったと非常に多くの学生が記

述しているのが「Twitter」や「mixi」,「skype」といったサービスである。連絡手段として重宝したという記述が多くある一方で、真偽の分からない多くの情報が流れ翻弄されてしまったことも事実である。「情報を取捨選択する上で、自分で一度考える」という基本姿勢は必要不可欠である。しかし「Twitter」を始めとする情報サービスも、高齢者を始めどんな世代にとっても平等に活用できる手段といえるかどうかは疑問が残り、世代に関係なく活用できるシステム作りが今後求められる。

5-6 具体的にできる対策

各々の意識だけではなく、具体的な防災対策の指摘や提案といった形での記述も多く見られた。代表的なものとしては、3月11日を受けて、被災地に向けて自分たちにできることに関する記述である。「募金」や「献血」といったものを始めとして、「経済を回し被災地にも還元する」努力に加え、「継続的かつ直接的な支援」を重要視した記述が目立つ。

また、被災地で実際に生活している方の「心のケア」や「思いやる心」を大切に生活していきたいという記述もあり、これは5-4にも共通することだと考えられる。国全体で一丸となって支え合いたいという意思表示にもつながっている。

6. まとめ

東日本大震災当日、突然の発生した大地震の中で

自宅へ帰る道筋には学生それぞれの大変さがあったことが分かった。家族となかなか安否確認・連絡がとれず、限られた帰宅方法しかとれなかった事態に、心身ともに疲れを感じた学生がいた一方で、自宅にいながら冷静に避難へ向けて対処した学生もいる。また、自宅以外で夜を明かすことになった学生の記録からは、施設側の迅速な対応を実感し、無理をして帰宅をしないという選択肢の有効性が分かった。

計画停電の影響を受けた学生は、電気の無駄遣いを見直し様々な形で節電の工夫を行っている。計画停電の実施は初めてであり、開始時間が不確定であるため知らされる時間と異なり、戸惑っている様子や被災地や電力源を思いやり自主的に停電を行う姿が見られた。これらの記録の特徴としては、停電実施時間を中心に生活が営まれているということが挙げられる。

これらを経て学生が感じたこととして最も多く見られた記述は、「これまで当たり前と捉えてきた生活の脆さやありがたみに気付いた」というものである。

今までのくらしがいかに電気に依存していたかに改めて気付かされ、日常生活に工夫を加えることで節電は可能であることを実感することで、今までのくらしを考え直すきっかけとなった。

今後の課題としては、今回の記録を更にすまいと関係づけて分析を行うことや、意識の変化が今後のくらし方にどのように影響を及ぼすのか、追って具体的に調査・分析することが考えられる。